

特集

実践報告

あざみ寮の生活のなかでの表現活動

石原繁野・張貞京

1 はじめに

あざみ寮¹⁾の表現活動のすべては、一人ひとりの様々な思いや願いを集団生活の日常の中で表現し取り組まれている実践の過程である。そして、一人ひとりの人生そのものでもある。

あざみ寮は1953年に女子の職業訓練を旨とし、糸賀一雄の私塾として大津市内に設立された。1969年には石部町(現、湖南市)に移転し、知的障害者更生施設のあざみ寮となり、知的障害者授産施設のもみじ寮(男子寮、女子寮)との大きな集団となっている。あざみ寮は集団生活と仕事を基本に育ちあう実践を積み重ねており、移転後も集団の大きさを活かした取り組みを続けてきた。あざみ寮から始まった表現活動を代表するものとして、あざみ織と劇が挙げられる。その始まりから現在に至る概要を以下に紹介していく。

あざみ織の始まりについて、糸賀一雄は次のように思いを記している。

「織物は、もともと女の子たちにとって、昔からの伝統と実益という魅力をもった、興味ある教材となるものであった。理屈はともかく、ひとつには、私は織物、特に手で作る織物の味にひかれていたし、なんとなく、そういう仕事はこの娘たちに向いているという感じをいただいていたのである。(中略)暮らしのなかに素朴な実用に耐える芸術を生み出すのである。そういう生産者とし

て、あざみ寮の娘たちはふさわしいのではあるまいか。」(糸賀, 1982)

具体的にあざみ織を進めるにあたり、糸賀一雄は倉敷民芸館の外村吉之助に相談する。その後、能力の差が大きかったあざみ寮の人たちに対して、いっしょにできる仕事として毛織物の一貫作業が提案された。ホームスパンと呼ばれる毛織物作業は羊の毛を洗う作業から染め、紡ぎなど、1台の機を動かすために、18人の力が必要な共同作業である。この作業を通して、能力の差や作業の大小に関わらず、協力し助け合う関係の育ちを可能にし、仕事を持つ大人となるあざみ寮の集団形成が確実に進んだといえる。集団の育っていく様子を糸賀一雄は下記のように書いている。

「織物という一つの作業を全体の共同作業にすることは、子どもたちの中から、少しずつ不協和音を取り去るのに役立つ。能力に応じた仕事をすること、そのどれ一つが抜けても、ホームスパンはできないということが、いちばんすばらしいことである。それをみんながめいめいに自覚するようになってきたせいであろう。また他人に対する思いやりが、少しずつ芽生えてもきた。寮全体がこの作業に注意を向け、驚異の眼でながめてくれているという全体の雰囲気、子どもたちをこの仕事のなかに安定させるのに大きな役割をはたしているのであった。」(石原, 1984)

ホームスパンから始まったあざみ織は、毛織に木綿織やむすび織(小さなじゅうたん織)が加わり、一人ひとりが成長できる仕事場として、実用的かつ芸術的な作品を作りだす現在のあざみ織工房に至っている(写真1、写真2)。

いしはら しげの 元あざみ寮施設長(社福)大木会・滋賀県湖南市)
ちゃん ちよんきよん 京都文教短期大学



写真1 自分たちで織った織物のベストを着て

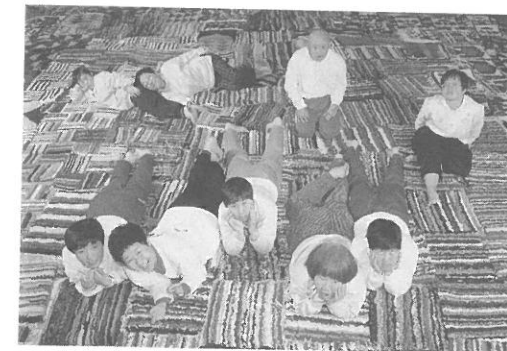


写真2 結び織のマットと作者たち

大津のあざみ寮時代にクリスマス会などでの発表会のようなものはあった。1969年の石部町への移転の後、生活の集団があざみ寮、男子寮、女子寮の3棟に分かれたことから、各寮が3月のひな祭りの時期に一つずつ劇を発表したことが劇活動の始まりだったと聞く。この劇はひな祭り寮生劇として現在も続いている。その劇を発展させ、1979年のあざみ寮25周年、もみじ寮10周年の創立記念に合わせて、全員で一つの劇をしようと取り組んだのが「ロビンフッド寮生劇」と呼ばれる劇活動である。当時のあざみ寮長であった糸賀房がロビンフッドの物語を提案し、映画「夜明け前の子どもたち」撮影時から、大津のあざみ寮に通っていた演出家の秋浜悟史、音響専門家の大野松雄らの協力を得て進められていく。そして、演劇関係の若者が多数参加し、裏方まで一緒に作り上げていったそう。ロビンフッド寮生劇はこれまで7回上演している。そして、毎年のひな祭り寮生劇にもたくさんの人たちが関わっている。

本稿は、元あざみ寮長でありあざみ工房を作り上げた石原が、自身の語りをもとに加筆した4事例を、石原の語り口を生かして張が再構成した「2 事例」を中心に、「1 はじめに」「3 4人の人生が表現しているもの」「おわりに」を張が担当し、ふたりの共同執筆としたものである。

2 事例

(1) 卒寿を迎える昌子さん

あざみ寮の最高齢者、昌子さんは、今年90歳、

卒寿を迎えます。あざみ寮で織物作業を始めた時のメンバーです。機織りを始めてもう54、5年になると思います。そして、90歳の今も、織物への意欲は衰えず、上達し続けているようにさえ思えるのです。日常生活も自分の老いをきちんと受け入れ、自立した生活ができています。彼女は今、卒寿の報告とお礼に、もみじ・あざみ寮を応援してくださる方たちに、90歳の今を織る、自分の作品を届けたいと、センターピースを織っています。

昌子さんは、思春期の頃からてんかん発作が始まり、一度発作が起きると二、三日の休養が必要なほど強い発作でした。歳を重ねることで回数も少なくなりましたが、発作は60歳を過ぎるまで続きました。彼女にとって、いつ起きるかわからない強い発作のあることは恐怖と不安の日々であったと思います。そんな暮らしの中で、機織りの技術を努力して取得し、織りあげて作品にしてゆく充実感、織りあがった作品を評価される喜び、応援してくださる人の輪、それらは彼女の病気への不安の日々を、希望にしていた大きな力であったと思います。

そして、何よりも昌子さんを支えた一番の力は、工房の仲間だったと思います。あざみ織工房は、昔ながらの本機を使っています。機織りのできる状態に経糸を掛けるには、いくつもの工程を踏まなくてはなりません。それはみんなにとっては、織ることよりも難しい作業で、一人ではできません。その作業を工房の仲間たちだけの力でできるように育ったことがあざみ織工房の力であり